

『表現学』第四号（平成三〇年二月二十五日）抜刷
大正大学表現学部表現文化学科

『トニー滝谷』の本文改訂(五)

— ショート・ロングヴァージョンの上海関係についての描写 —

森 晴彦

『トニー滝谷』の本文改訂(五)

—ショート・ロング両ヴァージョンの上海関係についての描写—

森 晴彦

はじめに

村上春樹『トニー滝谷』の本文異同についての考察を肅々と続けているが^①、本稿では、ショート・ヴァージョンと、増補されたロング・ヴァージョン c・1 にあたる『村上春樹全作品 1979～1989⑧』(平二、講談社。以下『全作品⑧』と略称)、そこから拙論で指摘したように五二箇所七九個の削除改訂を施すロング・ヴァージョン c・2・3 (単行本『レキシントンの幽霊』平成八年、文庫本『レキシントンの幽霊』平成二一年)における父滝谷省三郎と上海の描写について、増補訂や削除を中心とした本文異同を指摘しておこうとするものである。

旧稿でも示したが、本稿でも『トニー滝谷』の本文の分類について以下に簡便に示しておく。

- (a) ロング・ヴァージョン
- ・未発表
- (b) ショート・ヴァージョン
- ・「文藝春秋」六八巻七号、平成二年六月 (b・1)
- ・「文藝春秋短篇小説館」平成二年九月 (b・2)
- (c) ロング・ヴァージョン
- ・『村上春樹全作品 1979～1989⑧』平成三年七月 (c・1)
- ・単行本『レキシントンの幽霊』平成八年一月 (c・2)
- ・文庫本『レキシントンの幽霊』平成二一年一〇月 (c・3)

分類を見て分かる通り、(a)(c)の四種がロング・ヴァージョンとなるのだが、(a)については、未発表で、この(a)を削り、ショート・ヴァージョン (b) (正確には b・1) を書いた、と村上本人が記している^②。

そしてショート・ヴァージョン (b) を再度増補改訂して (c) 『全作品⑧』(c・1) が再びロング・ヴァージョンとして発表される。これをもって定本かと思いきや、単行本『レキシントンの幽霊』(c・2) 所収の本文は五二箇所七九個にも及ぶ削除改訂が施されている。大変異同の多いロング・ヴァージョンとなっている。

単行本『レキシントンの幽霊』(c・2) と文庫本 (c・3) では、四箇所の異同があるが、ほぼ同一本文と見做すことができる。異同は、文庫本一五頁二行目の「崇つて、一一六頁五行目の「美味いもの」、一一三頁四行目「憑かれた」の三箇所にルビが付されたことと、単行本一四八頁「靴のサイズ22」が文庫本一三五頁では「靴のサイズ22」とされる四箇所だけである。ルビは文庫化にあたって付されたものである^③。

本稿では、ショート・ヴァージョンと、ロング・ヴァージョン c・1 (『全作品⑧』)、五二箇所七九個の削除改訂を施すロング・ヴァージョン c・2・3 (単行本・文庫本『レキシントンの幽霊』の本文批評を比較し、上海関係の描写について、増補訂や削除を考察し、創作過程論上、特記せねばならないことなどを指摘して) ということとするものである。

滝谷省三郎の「上海」関係の改訂

ロング・ヴァージョン (c・1) 化された際に、顕著なのは、何といたっても父滝谷省三郎に関しての記述が大幅に増補されている点だろう。以下、注意すべき箇所に傍

線を付し、ロング・ヴァージョンでは『全作品⑧』(c・1)で増補加筆しながら『レキシントンの幽霊』単行本(c・2)文庫本(c・3)で削除した箇所を囲みで示す。「トニー滝谷の本当の名前は、本当にトニー滝谷だった」で始まる本作品、冒頭近く、「彼の父も母も、れっきとした日本人だった」に続く父の描写が次の記述である。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

彼の父親は滝谷省三郎という、戦前から少しは名を知られたジャズ・トロンボーン吹きだった。しかし戦争が始まる三年前に、ちよつとした面倒を起こして東京を離れなくてはならなくなり、どうせ離れるならということに中国にわたった。そして日中戦争から真珠湾攻撃、そして原爆投下へと到る戦乱激動の時代を、上海や大連のナイトクラブで気楽にトロンボーンを吹いて過ごした。戦争は彼とは関係のない場所で行われていた。

(c1、2・3) ロング・ヴァージョン(全作品⑧)、単行本・文庫本)

彼の父親は滝谷省三郎という、戦前から少しは名を知られたジャズ・トロンボーン吹きだった。しかし太平洋戦争が始まる四年ばかり前に、女の絡んだ面倒を起こして東京を離れなくてはならなくなり、どうせ離れるならということに楽器ひとつを持って中国にわたった。その当時、長崎から一日船に乗れば上海に着いた。彼は東京にも日本にも、失って困るようなものを一切持ちあわせなかった。だから未練の持ちようもなかった。それにどちらかといえばその当時の上海という街が提供する技巧的なあでやかさの方が彼の性格にはよくあっていたようだった。揚子江を遡る船のデッキに立ち朝の光に輝く上海の優美な街並を目にしたときから、滝谷省三郎はこの街がすっかり気に入ってしまった。その光は彼にひどく明るい何かを約束しているように見えた。彼はそのとき二十一歳だった。

そのようなわけで、日中戦争から真珠湾攻撃、そして原爆投下へと到る戦乱激動の時代を、彼は上海のナイトクラブで気楽にトロンボーンを吹いて過ごした。戦争は彼とはまったく関係のないところで行われていた。要するに、滝谷省三郎は歴史に対する意志とか省察とかいったようなものをまったくいっていいほど持ち合せない人間だったのだ。

ショート・ヴァージョンの「戦争が始まる三年前に」は、ロング・ヴァージョンで

は「太平洋戦争が始まる四年ばかり前に」に変更と増補がなされている。

これは昭和二年(一九三七)七月七日に始まった支那事変と呼ばれる日中戦争と解されるのを避け、昭和六年(一九四二)二月八日、米英に対して宣戦布告した太平洋戦争の方の「戦争」であることを明確にした改変・増補である。ロング・ヴァージョンが増補した太平洋戦争の四年前というところ、ちよつと日中戦争の頃合いとなる。ショート・ヴァージョンのように日中戦争の三年前とすれば、昭和九年(一九三四)あたりとなる。溥儀が皇帝に即位、満洲国は帝政に移行した年である。ロング・ヴァージョンでは昭和一六年の四年前、昭和二年あたりとなる。ちなみに、この年を境に上海渡航が激増するのは次に記しておく。

東京を離れることになった理由も、ショート・ヴァージョンでは「ちよつとした面倒を起こして」と曖昧にしているが、ロング・ヴァージョンでは「女の絡んだ面倒を起こして」と、東京を離れる理由が明記されている。古くは『伊勢物語』の業平のよくな都を離れる理由である。

音楽家——ジャズ・トロンボーン奏者という設定を活かし、ロング・ヴァージョンでは「どうせ離れるならということに楽器ひとつを持って中国にわたった」と「楽器ひとつ」を増補することで、「腕のいいプレーヤー」を暗示する表現にしている。そして最大の増補が上海の記述である。「中国にわたった。そして日中戦争から真珠湾攻撃、そして原爆投下へと到る戦乱激動の時代を」と通史のように流していく

ショート・ヴァージョンに対し、その前に上海の描写が増補され、滝谷省三郎が上海の街に幻惑されること、省三郎が失うものがない単独者であること、上海の街が明るい何かを約束しているように見えたこと——がリリカルに増補されている。

もちろん、「楽器ひとつ」をロング・ヴァージョンで増補したのは、京都上海というジャズの都で省三郎の奏者としての力量が通用し、上海での音楽三昧の気ままな暮らしぶりを補償する証左にもなっているわけだが、ここはショート・ヴァージョンの「ナイトクラブで気楽にトロンボーンを吹いて過ごした」の文言を詳述する役割を果たす増補になっている。

ロング・ヴァージョンで増補される「一日船に乗れば」云々は当時、日華連絡船と呼ばれる船が長崎から出ており(神戸起点長崎経由が昭和一三年から長崎発となる)、長崎から上海に渡航する人が昭和一二年に一万五三六一人だったものが翌一三年から五万六三四五人となり、以後一八年に二万人台となるまでの五年間は五万人台続きと

なる⁽⁴⁾。上海航路とも呼ばれ、約二六時間。四日周期で船が出ていたそうである。鷗外が『高瀬舟』で喜助には都に係累がないことやしがらみがないことを定位置したように、日本に名残はないこと、そして前途が洋々であること、上海の光が明るいなにかを約束しているかのようであること——など、ここでは増補しているのである。もちろん孤独が共通する滝谷親子の、最初の設定が父省三郎もまた家族縁の薄い人物である、という定位を行う役割も果してしている。

ショート・ヴァージョンでは「上海や大連のナイトクラブで気楽にトロンボーンを吹いて過ごした」とあるが、ロング・ヴァージョンでは「楽器ひとつを持って中国にわたった。その当時、長崎から一日船に乗れば上海に着いた」として中国とは示すがこれは国の意味で、めざした目的地は上海と読めるし、以後の描写はすべて上海の賛美であり、魔都（村松梢風）上海のみにしている。これは大連や上海を渡り歩いてきたと解されるのを回避したためであろうし、上海という都市で自分を活かす場所を見出した、という経緯にするためにも、二つの都市よりも一つにしたと考えられる。ならば「中国にわたった」も「上海にわたった」でも通るはずだが、そこは村上の中国への拘泥が残るのだろう。ロング・ヴァージョンの上海での描写は、まさに省三郎に合う水を見つけた記述である。なお、大連にも当時大阪—大連間に就航しており、神戸—大連間は約六七時間であった⁽⁵⁾。

ロング・ヴァージョンでは省三郎は「そのとき二十一歳だった」と年齢が増補されるので、先に見たロング・ヴァージョンで改変する「太平洋戦争が始まる四年ばかり前に」に拠ると、大正五年か六年の生まれとなる。ちなみに、村上の父千秋氏は大正七年の生まれ⁽⁶⁾である⁽⁷⁾。

ショート・ヴァージョンの「戦争は彼とは関係のない場所で行われていた」は、省三郎が戦争と対極に示していることを示しているが、当時の上海は戦火とは無縁ではなく、一二年の日中戦争開始後は激しい市街戦を経て租界外側は日本軍、共同租界とフランス租界は孤島状態となり、一六年からは全城を日本軍が支配するわけで⁽⁸⁾、けして安閑としていたわけではなかった⁽⁹⁾。ロング・ヴァージョンでは、そのあたりも勘案したわけではないだろうが、本人と無縁のところどころで起こっていた的な記述を弱め、「戦争は彼とはまったく関係のないところで行われていた。要するに、滝谷省三郎は歴史に對する意志とか省察とかいったようなものをまったくいっさいも持ち合せない人間だったのだ」と、「場所」という限定を削除し「関係のないところ」⁽¹⁰⁾とぼかし、

さらに「ようするに」と総括し省三郎本人の意識の問題に換言している。まったく関係のない「場所」ではなく「ところ」として、本人の無関心さの問題として処理しておしている。同時にこれは、全編を通じての省三郎のスタンス——生き方でもある。ロングの改訂によって以降の省三郎の在り方に納得できる要素が最初に示される形となったわけである。

ちなみに、ここまで太平洋戦争に、無関係な（ショート・ヴァージョン）・無関心な（ロング・ヴァージョン）父親像の描写は、父千秋氏の中国との関わりと真逆な父親を村上の無意識が定位置しようとしているのでは思われる描写である。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

彼は好きにトロンボーンが吹けて、一日に三度食べられて、女が何人かまわりにいれば、それ以上はとくに何も望まなかった。いささか身勝手ではあるがそれなりに気持ちのいい男だったし、おまけに楽器の腕がたつから、彼はどこに行ってもたやすく友人を作ることができた。

(c1) ロング・ヴァージョン（全作品⁽⁸⁾）

好きにトロンボーンが吹けて、まずまずの食事が一日に三度食べられて、女が何人かまわりにいれば、それ以上はとくに何も望まなかった。彼は謙虚であり、同時に傲慢な男だった。本質的にはおそろしく身勝手な人間ではあったけれど、普段はまわりの人間に対して非常に親切で気持ちのいい人間だった。だから大抵の人間は彼のことを好いた。若くて男つぶりがよくて、おまけに楽器の腕もいってきているから、どこに行っても雪の日のカラスのように目立った。

(c2・3) ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

好きにトロンボーンが吹けて、まずまずの食事が一日に三度食べられて、女が何人かまわりにいれば、それ以上はとくに何も望まなかった。

大抵の人間は彼のことを好いた。若くて男つぶりがよくて、おまけに楽器の腕もいってきているから、どこに行っても雪の日のカラスのように目立った。

ショート・ヴァージョンの「いささか身勝手ではあるがそれなりに気持ちのいい男だった」を、ロング・ヴァージョン『全作品⁽⁸⁾』（c1）で詳しく描写したにも関わらず、書き過ぎと考えてロング・ヴァージョン『レキシントンの幽霊』単行本（c

・2) 文庫本(c-3)で囲みの部分を削除してしまうのである。『全作品⑧』(c-1)の重要な点は、本来、省三郎の人物設定として囲みの箇所を定位していたことが判る点である。ここまでの設定をしておきながら単行本(c-2)では潔く削除するのである。

『全作品⑧』(c-1)で増補した(c-2・3にも継承)「若くて男っぷりがよくて」と「どこに行っても雪の日のカラスのように目立った」は、ショート・ヴァージョンが「たやすく友人を作ることができた」という省三郎自身の社交性の性質を、周囲がほっとかない稀有な魅力的な目立つ人材、という存在に置き換えている。

ショート・ヴァージョンの「一日に三度食べられて」も、ロング・ヴァージョンでは「まずまずの」という副詞を乗せ、完璧ではないが許容できる水準は越えたところの食事、という拘泥が追加されている。ただ三食あればいいわけではない、ということである。

「女が何人かまわりにいれば」はロング・ヴァージョンでの増補として次のように具体例をもって示される。

(b-1・2) ショート・ヴァージョン
なし

(c-1・2・3) ロング・ヴァージョン(全作品⑧)、単行本・文庫本)

数えきれないくらい沢山の数の女とも寝た。日本人から中国人から日系ロシア人、娼婦から人妻、美しい女からそれほど美しい女まで、彼はほとんど手当たり次第に女と交わった。滝谷省三郎はあくまで甘いそのトロンボーンの色と、巨大にして活動的なそのペニスとによって、当時の上海の名物的存在にさええのしあがったのであった。

省三郎が上海でいかに個人的にせよ自由な生活を謳歌しているか、を表す描写で、巨大で活動的な描写からも、彼の持つ力を誇示している箇所である。甘いトロンボーンの色と巨大なペニスが対になっていることから判るように、彼の特技とか武器とか取り柄であるわけであるが公私(あるいは昼夜)にわたって絶大であることを示している。一介の演奏家ではなく、日本人が二万六千人はいた上海で、名物的存在にのし上がるわけだから、保有する力の誇示としてはこれ以上ない描写では

ある。ただ、ここでの有頂天はやがて来る下落のための運命の水車の位相であることも小説の仕掛けとしてなされているのは言うまでもない。

(b-1・2) ショート・ヴァージョン)

本人はとくに意識してそうしたわけではないのだが、「役に立つ」友人を作る才能にも恵まれていた。彼は軍の高官や、中国人の金持ち連中や、その他戦争をくいものにする羽振りのいい連中に可愛がられた。何か問題が起きれば、彼らは快く滝谷省三郎の便宜をはかってくれた。その時代の滝谷省三郎にとって、人生とは実にたやすい作業だった。

(c-1・2・3) ロング・ヴァージョン(全作品⑧)、単行本・文庫本)

彼はまた——とくに本人は意識したわけではないのだが——「役に立つ」友人を作る才能にも恵まれていた。彼は軍の高官や、中国人の金持ち連中や、その他様々な正体不明の方法で戦争から莫大な利益を吸い上げている羽振りのいい連中と親しくつきあった。その多くは常に上着の下に拳銃を忍ばせて、建物から外に出るときはまずさつと通りの上下を見渡すようなタイプの人々であったが、滝谷省三郎は妙に彼らと気があった。そしてまた彼らは彼のことをとくに可愛がった。何か問題が起きれば、彼らは快く滝谷省三郎の便宜をはかってくれた。その時代の滝谷省三郎にとって、人生とは実にたやすい作業だった。

ここは基本的な骨格は同じのだが改訂されているのは、ショート・ヴァージョン「その他戦争をくいものにする羽振りのいい連中」をロング・ヴァージョン「その他様々な正体不明の方法で戦争から莫大な利益を吸い上げている羽振りのいい連中」とする部分で、彼らが戦争産業に寄生している輩であることを明確にした上で、ロング・ヴァージョンではさらに、「その多くは常に上着の下に拳銃を忍ばせて、建物から外に出るときはまずさつと通りの上下を見渡すようなタイプの人々であった」を増補し、彼らをより具体的に記す。これら裏社会と通じている人物たちに可愛がられ便宜をはかってもらい、上海で大変自由に生きることが出来たことを示している。両ヴァージョンとも「その時代の滝谷省三郎にとって、人生とは実にたやすい作業だった」と記すのはそのためである。

(b-1-2) ショート・ヴァージョン

しかしそういう結構な能力も時には裏目に出ることがある。戦争が終わったあとで、彼は様々な胡散臭い連中との交遊が祟って中国軍当局に目をつけられ、戦犯として長いあいだ刑務所に放りこまれることになった。

(c-1-2-3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧、単行本・文庫本)

しかしそういう結構な能力も時には裏目に出ることがある。戦争が終わったあとで、彼は様々な胡散臭い連中との交遊が祟って中国軍に目をつけられ、長いあいだ刑務所に放りこまれることになった。

滝谷省三郎はあくまで一般人なので中国軍当局が出てきてマークする重要人物とは言い難いし、彼は直接日本軍に関係しているわけではなく、軍属でもなく、密偵であったわけでもない。よって「当局」を省略したのだろう。「戦犯」も軍関係者や直属の支配下にあるわけではなく、かつ厳密には戦犯と呼ばれる対象者は狭義には極東軍事裁判による戦争犯罪者なのでロング・ヴァージョンでは削除されている。プロットとしてはショート・ヴァージョンで十分、書きたい内容は示されているが、より具体化するロング・ヴァージョンの際には、表現としては勇み足の「当局」「戦犯」を削除したわけである。

(b-1-2) ショート・ヴァージョン

同じように投獄された連中の多くはまともな裁判も受けずに順番に処刑されていた。ある日突然刑務所の中庭に連れ出されて、自動拳銃で頭を撃たれるのだ。

(c-1-2-3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧、単行本・文庫本)

同じように投獄された連中の多くはろくな裁判も受けずにかたっぱしから処刑されていた。ある日何の前触れもなしに刑務所の中庭に連れ出されて、自動拳銃で頭を撃たれるのだ。処刑はいつも午後の二時に行われた。ヒョウン、という硬く圧縮されたような自動拳銃の銃声が刑務所の中庭に響いた。

ショート・ヴァージョンの方が「まともな裁判も受けずに」「順番に」とあって、「理路整然と処刑が遂行」される感があるが、ロング・ヴァージョンでは「理不尽にどんな処刑される不条理」が「ろくな裁判も受けず」「かたっぱしから」という改変から

強調されることになる。

ショート・ヴァージョンの「突然」がロング・ヴァージョンでは「何の前触れもなしに」に改変されるが、『トニー滝谷』という作品を貫く「何の前触れもなしに」という言辭は——何の前触れもなしに、両親は結婚し、母が死に、恋に落ち、彼女が死に、孤独とともに生きねばならぬトニー滝谷をよく表す言辭であるが——非常によくこの作品を表す言辭であるだけに、運命に翻弄される省三郎を示す場面で使用されることは大変効果的である。「突然」より明確に「運命という力の存在」を顕現化させる言辭である。「処刑はいつも……」以降の増補も処刑にリアリティを与えている。

(b-1-2) ショート・ヴァージョン

これはまさに滝谷省三郎にとって人生最大の危機だった。そこでは生と死のあいだには、文字通り髪の毛一本くらいのすきましかなかった。

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

これはまさに滝谷省三郎にとって人生最大の危機だった。そこでは生と死のあいだには、文字通り髪の毛一本くらいの隙間しかなかった。おそらく自分はこの死ぬことになるのだろうと彼は思った。死ぬこと自体はそれほど恐ろしくはなかった。

(c-2-3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本)

滝谷省三郎にとって人生最大の危機だった。そこでは生と死のあいだには、文字通り髪の毛一本くらいの隙間しかなかった。死ぬこと自体はそれほど恐ろしくはなかった。

囲みがロング・ヴァージョン『全作品⑧』から削除された箇所だが、後半は省三郎の推量の部分で、省三郎が主人公であるかのごとき描写になりかねないため削除したと考えられる。トニー滝谷の描写にこうした性質の本人の推量が使われており、「これはまさに」と相まって、省三郎が主人公と取られかねないための削除である。

「これはまさに」はショート・ヴァージョンからロング・ヴァージョン『全作品⑧』

(c-1) に受け継がれたものだが、全作品⑧が「おそらく自分は……」以降を増補したために、そぐわなくなつたものである。そのため『レキシントンの幽霊』単行本(c-2)で削除したと考えられる。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

なし

(c1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧、単行本・文庫本)

頭を撃ち抜かれて、それでおしまいなのだ。苦痛はほんの一瞬で終わってしまふ。これまで俺はやりたいうように生きてきたし、ずいぶん数の女とも寝た。美味しいものも食ったし、いろんない目にもあった。とくに人生に対して心残りもない。

ショート・ヴァージョンは、日本に帰るために人に言えない策を弄した話につなげるが、ロング・ヴァージョン『全作品⑧』では省三郎がここで殺されても人生に心残りはない、とするくだりを具体的に描写する。この増補は『レキシントンの幽霊』(c1・2・3)でもそのまま継続されている。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

なし

(c1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

ここであつさり殺されたとしても文句の言えるような義理はなかった。まあこんなものだろう。贅沢は言えない。この戦争では何百万という数の日本人が死んだんだ。もつとひどい死に方をした人間だ。っていっばいいるんだ。彼はそう覚悟をきめて、独房の中のんびり口笛を吹きながら時を過ごした。来る日も来る日も、鉄格子のついた小さな窓の外を流れる雲の姿を眺め、しみだらけの壁の上になんかまで寝た女の顔や体をひとつひとつ思い浮かべて行った。

(c2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本)

ここであつさり殺されたとしても文句の言えるような義理はなかった。この戦争では何百万という数の日本人が死んだんだ。もつとひどい死に方をした人間だ。っていっばいいるんだ。彼はそう覚悟をきめて、独房の中のんびり口笛を吹きながら時を過ごした。来る日も来る日も、鉄格子のついた小さな窓の外を流れる雲の姿を眺め、しみだらけの壁の上になんかまで寝た女の顔や体をひとつひとつ思い浮かべて行った。

ロング・ヴァージョン『全作品⑧』(c1)で増補した際は、省三郎の性格を端的に表現する、「まあこんなものだろう。贅沢は言えない」という文言を記しながら、これは書き過ぎなのとあまりの謙念ぶりに『レキシントンの幽霊』(c2・3)では削除している。トニー滝谷本人ならば囲みの箇所があつてもおかしくはないが、ここもあくまで省三郎の内省のことゆえ割愛したと考えられる。また、「まあこんなものだろう」があるとその適当さが鼻につき過ぎて何百万の犠牲者をも軽くしてしまうし、後半の「彼はそう覚悟をきめて」がこの箇所を受けることになっているが、何百万人の犠牲が出ているのだから目の前の死を受け入れよう、という覚悟が軽いものに取り戻ってしまうおそれを回避したための削除でもある。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

しかし彼は策をつくして(それがどんな策だったか、滝谷省三郎は誰にも語ろうとはしなかった)なんとかその苦境を脱し、命からがら日本に引き揚げてきた。たとえそれが人前で口にすることが憚られるような種類の策であつたにせよ、そのような父親の現実的な抜け目なさによって、トニー滝谷の存在もまた可能ならしめられたわけである。

(c1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

しかし結局ところ、滝谷省三郎はその刑務所から生きて日本に帰国することのできたただ二人の日本人のうちの一人だった。生き残つたもうひとりの高級将校はほとんど頭がおかしくなっていた。彼は引揚げ船のデッキに立つて、やつてきたときは逆にだんだん遠ざかって小さくなっていく上海の街を眺めながら、人生というのはわからんものだなと思つた。

(c2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本)

しかし結局ところ、滝谷省三郎はその刑務所から生きて日本に帰国することのできたただ二人の日本人のうちの一人だった。

ショート・ヴァージョンの書きぶりだと、どれだけ省三郎が奸智に長けた狡猾な人物で、裏ルートを駆使して帰国できたかが示されているが、人前で口にできない種類の策とまで書かれれば戸籍買働さへ想起されるくらい悪い策を弄しての帰国と読めてしまう。ここでも省三郎の黒い努力によって帰国できたという点が強調されてしまう

と、省三郎が帰国のために能動的に獅子奮迅の努力をしたように描かれている。これは村上が書きたかった省三郎帰国顛末記では当然ないだろう。

ロング・ヴァージョン『全作品⑧』では打つて変わって省三郎は他律的であり、本人の意志や努力とは全く無関係の——意志や努力が全く役に立たない、運命とでも呼べるような偶然によって助かる、と改訂する。とても幸運だったことを示すため、「生きて日本に帰国することのできたただ二人の日本人のうちの一人だった」とも記す。もう一人は高級将校だったが彼の精神は崩壊していた、とする。省三郎がいかに幸運かを物語るエピソードになるはずであった。続けて「やってきたときは逆にだんだん遠ざかって小さくなっていく上海の街を眺めながら、人生というのはわからんのだなと思つた」と続けるが、この一言は省三郎の人間性を端的に現わしてはいるのだが、「ここで使われることで幸運さや運命がちゃかされてしまふ適当さが充満している。前にもあったが、トニーの台詞なら許容はされるが、省三郎は主人公ではないのだからここは軽い感想めいた文言は不要である。

ロング・ヴァージョン『レキシントンの幽霊』(c. 2・3)では囲みの箇所をすべて削除し、事実だけを淡々と記す文になっている。この形がこの場面にはふさわしいと言えるだろう。

ちなみに、省三郎は「ただ一人生き残つた日本人」と換言することができるわけだが、このフレーズを村上は早くに使用している。そう、『風の歌を聴け』で三人の叔父の話が出てくる。一人は上海の郊外で死ぬ。ただ一人生き残つた三人目の叔父は手品師になって全国の温泉地を巡っている、と出てくる箇所に「ただ一人生き残つた日本人」というフレーズが登場していることを付記しておく。

おわりに

過去の作品への言及は避け、『トニー滝谷』のみの本文批評だけに絞ろうとはしているのだが、脱線を許していただけならば、『風の歌を聴け』に出てくるジェイズ・バーの中国人ジェイは米軍基地のアメリカ人たちが付けた名前であることが想起されるのである。

「ジェイ」は「J」でありジャパンを象徴するとすれば、中国人に「日本」と名付ける輩行は、大戦下での中国に対しての日本の侵略をジェイは体現しているとも読める

だけに、軽くはないネーミングである。そして、米兵が名付け親だという構図は、まさにトニー滝谷と同じである点も見逃せない。

省三郎の記述——ロング・ヴァージョンでの増補については、「中国人への罪」というテーマを読み取って藤井省三氏が指摘するところであるが、

「敬虔な仏教徒」である村上の父は、中国侵略戦争に動員された体験によりその人生が「大きく変わってしまった」、子供時代の村上に「中国の風土や民情」を話しても、「決して戦争のことは口に」しなかった。村上の父は精神的に滝谷省三郎と対極に位置しており、父が語りぬ戦争の記憶を、息子の村上は「記憶の影」として継承したのであるうか⁽¹⁰⁾。

と指摘する。藤井氏は「中国は僕にとつて書こうと思つて想像するものではなく、「中国」は僕の人生における重要な「記号」なのです」という洪金珠『中国時報』一九九八年八月のインタヴューと「いまだに中華料理が食べられない」のは父の中国でのことがあるからで、父が中国侵略戦争に加担したことが村上のトラウマになっていると指摘するイアン・ブルマのインタヴューを示しつつ、論を展開していくのである。藤井氏は『論語』学而第一「吾日三省吾身」を引き、反省を名前に持ちながら、滝谷省三郎が全く「歴史に対する意志とか省察をまったく欠いた人間」であることを指摘するが、重要な指摘である。京都の浄土宗の寺院に生まれ、京大の院生(旧制)だった村上の父千秋氏が戦後も中国戦線でのことを忘れず、決して語りぬことと反省のない省三郎は対極なのである。『トニー滝谷』は、トニーが村上と同じ昭和二十四年生まれである。省三郎は大正五年、村上千秋氏が大正七年の生まれである。

さて、本稿が少しく見てきたように、『トニー滝谷』の上海関係の増補訂は、父滝谷省三郎に關係しての描写を増補したためのものであることが判る。

滝谷省三郎の上海描写の増強の背景には父千秋氏の語らない中国でのあれこれが内在しており、その内在したものを抱えきれない段階にいた村上は、重い十字架を背負つた父とまったく対極の省三郎像を造形していると考えられることでもできるわけである。増補削除の改訂過程には、村上の太平洋戦争に対しての関心と真逆に無関心な省三郎像の位相が対極として描かれているのである。

《注》

- (1) 拙論『トニー滝谷』の本文改訂(一)―シャネル削除による人物造形―「解釋學」六七輯(平二五・三)、『トニー滝谷』の本文改訂(二)―シヨート・ロング両ヴァージョンそれぞれの本文異同―「解釋學」七三輯(平二七・三)、『全作品』所収『トニー滝谷』本文の性格―定本との差異とその独自性が意味するものと―「解釈」六二巻七九号(平二七・八)、『トニー滝谷』の本文改訂(三)―全作品⑧本文の性格続・五二箇所七九個の本文異同一覽―「表現學」三号(平一九・三)、『トニー滝谷』の本文改訂(四)―番外編・トニー谷と滝谷親子、その同時代性―「解釋學」八一輯(平一九・一一)。
- (2) 『村上春樹全作品1979～1988』月報「自作を語る・新たな胎動」(平三、講談社)および『レキシントンの幽霊』単行本・文庫本のあとがき。
- (3) 注1拙論参照。
- (4) 『長崎市制六十五年史』(昭二四、長崎市)一〇三頁参照。
- (5) 劉婧「日本人旅行記からみる20世紀前期の大連航路」(或問)一九号、近代東西言語文化接触研究会、平二二・一二)。
- (6) 村上のエルサレム賞受賞のスピーチ(平二二・二)において、昨年九〇歳で父が亡くなったことを語っており(千秋氏は平成二〇年八月に死去、千秋氏は大正七年生まれである)。
- (7) 注1の拙論「本文改訂(四)」では指摘するにとどめたが、滝谷省二郎が大正五年生まれで戦前上海、村上交が大正七年生まれで戦前中国に従軍、トニー谷が大正六年生まれで戦前南京上海に召集、という近似の設定は、当時この年代の人たちにはよくあつた事例なのだろうが、「本文改訂(四)」で示したトニー谷の要素は見逃せない類似があるので付記しておきたい。トニー谷が晩年をハワイで過ごすのが、「トニー滝谷」のTシャツも実際する人物もハワイが起点であることも奇妙な符合である。
- (8) 一九二七～四一年(太平洋戦争開始まで)、孤島期、一九四一～四五年(終戦まで)、日本軍占領期の区分は榎本泰子氏『上海』(中公新書、平二二)一二頁に拠った。
- (9) 注8の榎本氏も引用しているが、林京子『ミッシェルの口紅』(昭五五、中央公論社)、『林京子全集』二巻、平一七所収)に軍靴の音が日常生活に及び、爆弾事件があつて等の上海の場面が克明にある。もちろん他にも作品はある。なお、趙夢雲氏『上海・文学残像―日本人作家の光と影』(田畑書店)に『上海・文学残像関連年表』という作品年表がある。
- (10) 『村上春樹のなかの中国』(平一九、朝日新聞社)六〇～六四頁。以下、藤井氏の論はすべて同書に拠る。